

博物館へ寄贈された故熊沢正夫教授による研究資料と
その裏面に残る記事について

Notes on a document of Professor Masao Kumazawa (1904–1982)
donated to the Nagoya University Museum

原 幸喜 (HARA Koki)¹⁾・西田佐知子 (NISHIDA Sachiko)²⁾

1) 愛知県名古屋市千種区

Chikusa-ku, Nagoya City, Aichi Prefecture

2) 名古屋大学博物館

The Nagoya University Museum (nishida@num.nagoya-u.ac.jp)

Abstract

A document including sketches of vascular bundles in SHUROCHIKU, *Rhapis humilis* (Palmae), and notes on literatures by the late Prof. Masao Kumazawa (Nagoya University) was donated from professors of the Aichi gakuin University to the Nagoya University Museum in 2004. The sketches and notes were provided on the backside of old papers originally used for student examinations or administration purposes in 1948–50. Prof. Kumazawa re-used these papers for his own research activities during the difficult years of material shortages after the World War II.

はじめに

本資料は、植物形態学・器官学の権威である故熊沢正夫先生(旧制第八高等学校教授・新制名古屋大学教授)による、シュロチクの茎断面のスケッチ画と、文献を読んだ際に作られたメモの遺品である。これらは、熊沢先生の担当した試験の回答用紙および事務関係の印刷物の裏に書き込まれた。この資料は2004年に名古屋大学博物館へ寄贈されたが、その寄贈の経緯と、資料の作られた時代に関する考察を以下に紹介する。

なお、この紹介を執筆するにあたっては、資料の調査および原文の執筆の殆どを原が担当し、その確認・編集などを西田が担当した。

寄贈の経緯

この資料は熊沢正夫先生の没後(1982)に、当時愛知学院大学教養部教授であった高木典雄先生(名古屋大学名誉教授)に伝えられたものである。更に高木先生の愛知学院大学退職(1991)に際して、当時同大学教養部教授であった原幸喜に伝えられた。その折の高木先生の希望は、「物あまりの時代に育った学生達に、物を大切にしたい先人達の例としてこれらの資料を示してほしい。また、緻密堅牢な学問を構築するのに高価な道具機械は必ずしも必要ではないことや、第二次世界大戦後の食料その他物資不足の時代にあっても、嘗々と学問研究の道に勤しまれた熊沢先生の気迫の一端を、学生たちに知らせてもらいたい。」ということであった。

原は在職中(1982/2000年度)折にふれて資料を学生たちに示し、それに接した者はみな深い感銘を

受けた。生物学教室に新しく着任した安富眞澄教授と原は相計って、この資料が持つ研究面と教育面との両面からの価値を、社会のより広範囲にわたって活かしたいと考え、この資料を熊沢先生ゆかりの名古屋大学博物館へ寄贈することにした。

資料の概要

この資料は以下の2種類の研究資料からなる。

資料 1. 「スケッチ画」(図1): シュロチク維管束走行追跡のための茎の横断面図88枚と、その部分拡大断面図46枚との計134枚(B5判)

資料 2. 「文献メモ」(図2): 植物学の学術雑誌 Biological Abstract と Botanical Gazette から抜粋した文献についての研究メモ計12枚(B4判)

資料 1には各図面の右肩に熊沢先生の手で順に通し番号が付けられている。資料 2には 1のような通し番号はない。

資料 2の12枚のうち9枚は、Biological Abstractの21巻1号から10号までと、22巻1号から10号(1948年刊)まで、更に23巻1号とから抽出された総計60編余の論文についての、ほぼ抽出巻号順に並んだメモである。(最後尾23(1)の記載の後は空白で「No.2 未」とある。これは、そのメモの作成時にNo.2が未着であったか、或いはともかくも未見であったことをうかがわせる。)その他の3枚は、Botanical Gazette 110巻1号(1948年刊)と110巻3および4号(1949年刊)の3つの巻号から抽出された19論文の、巻号順のメモである。

これらの資料に利用された用紙は、すでに一度別の目的(後出)で使われたもので、いわば「資源の再活用」をしたものである。材質はいわゆるワラ半紙である。2004年1月現在、およそ半世紀の歳月を経て、縁が一部分欠けているものもある。しかし資料 1で鉛筆描きの図の中に使われた5色の水彩は、はっきりとした色をとどめている(図1)。

研究資料の用紙の出所とその年代

熊沢先生が使われた用紙の出所は大きくわけて、(A)事務書類(図3)と(B)試験答案用紙(図4)との二つがある。

(A) 事務書類

資料 2のはじめの3枚の裏面は、全国共通の進学適性検査にかかわるものである。そのうち2枚目には、青色謄写版刷りで「進学適性検査問題用紙の受領について」という表題があり、もともとは1枚目とつながってB4版であった。2枚目に書かれている「受領日」が「1月24日(火)」とあることから、当日が火曜日である昭和25年度のものとして解される。3枚目昭和24年12月2日以降の出願者についての表にある出願年月日が、25年1月17日に及んでいることもこれと符合する[名古屋大学五十年史通史二 p297 参照]。

なお、これらの用紙には以下のような3つの特徴がある。

- (1) 出願締め切り以後の出願者を、特別扱いの「遅れの出願」として救済措置をとっているらしいこと。
- (2) 「検査用紙」について「印刷部数を必要最小量にとどめるため余分がない」とあり、物資不足の

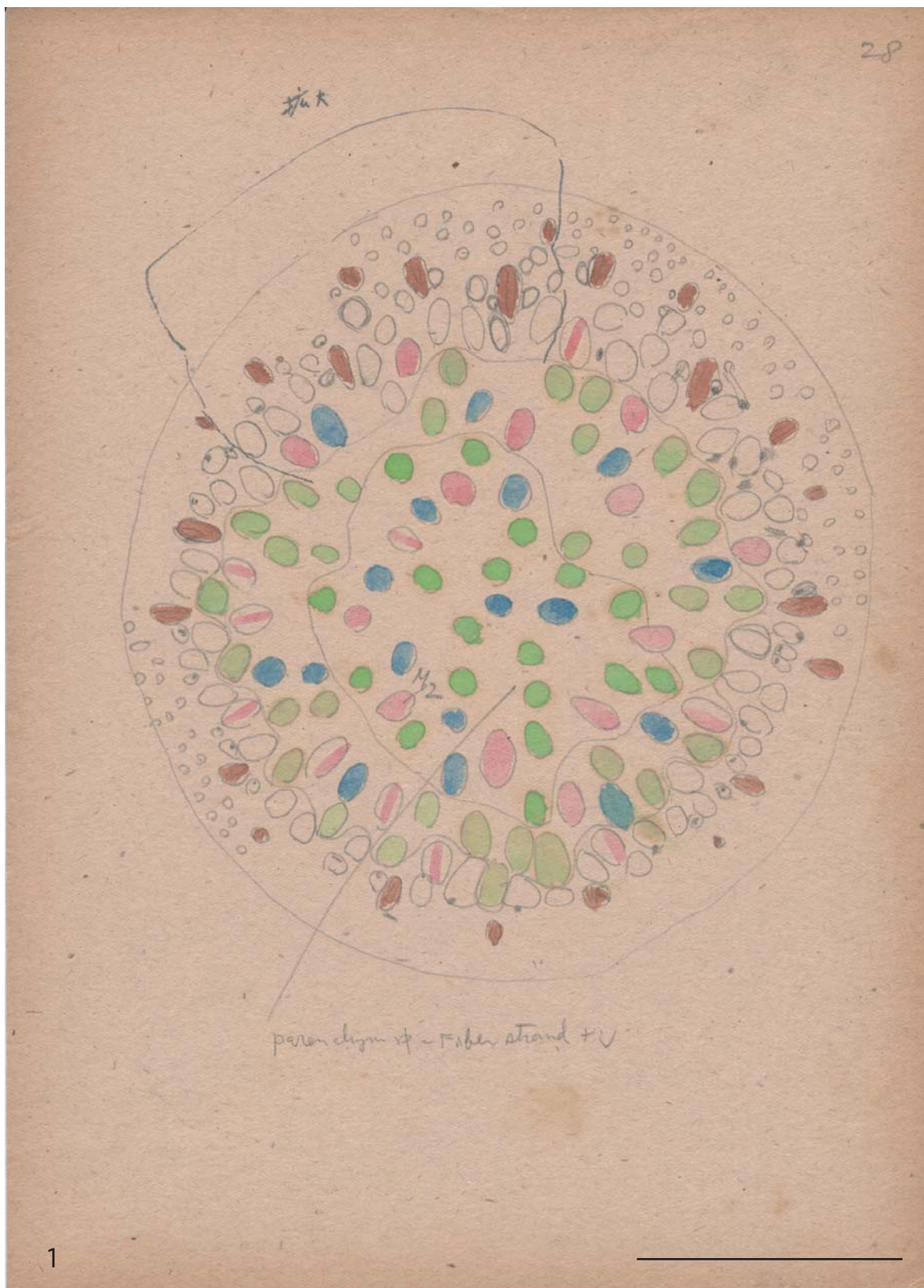


図1．熊沢先生によるシュロチク茎断面のスケッチ画の一例
スケールバーは5 cm .

状態を示していること。

(3) 「検査用紙運搬途中乗車内の検査等にそなえ・・・(中略)・・・本省において証明書を交付する」とあって、物資運搬中のいわゆる『臨検』の可能性を予想していること。

(1) の「遅れの出願」は、愛知県内(あるいはその一部)を対象としたものとみられる。2枚目および1枚目の「問題用紙の受領について」の通達は、それが中央の機関から出た通達用紙そのもの(あるいはその一部)か、その内容を愛知県レベルで謄写版によって複製したものが、即断はできない。いずれにせよこれらの書類から読み取れる上記の諸点は、当時第二次世界大戦後の窮乏混乱から復興安定への道を歩んでいた、そのひとこま(日本はまだ被占領国!)を示すものとして興味深い。

(B) 試験答案用紙

前述の3枚を除く資料 131枚と、資料 12枚との合計143枚はすべて、もともとは旧制第八高等学校と新制名古屋大学教養部における、熊沢先生担当の生物学試験答案用紙であった。

答案用紙には問題は印刷されていない。しかし若干の答案には、口頭ないし板書で示されたと思われる問題が書きとめられている。それらから察するに、試験は、重複受精や従性遺伝や細胞質遺伝などについて記述するものであったらしい。

資料 1 を通じて裏面に記名のある用紙計71枚について、それぞれの学生氏名を「第八高等学校同窓会名簿平成15年版八高会(2003)」によって検索した結果は、次の表にまとめることができる(表1)。

表1. 資料 1 の裏面に記名がある学生のグループ分け(数字は枚数)

資料別枚数	学生の回生別	八高39回生 (昭和24年3月卒) (1949)	八高40回生 (昭和25年3月卒)	八高41回生 (24年3月1学年終了) [新制名大1回生]
断面図 39		8	29	2注*
拡大図 20			20	
文献メモ 12			1	11
計 71		8	50	13

71枚の回答用紙にある回答者のうち2名は重複しており、個人が特定できた学生数は合計69名である。重複する学生では、いずれの場合も回答している問題の構成が異なることから、同一人が異なる時点で受けた2つの試験の答案用紙であることがわかる。

表1注*の2枚には、他の67名の学生とは異なるクラス表示「S・E」および「S・A」がみられる。旧制八高でのクラス表示は「理一・三」、「S3・5」のように、科・学年・組の最後尾を数字で示してい

図2. 熊沢先生による文献メモの一例、ただし、写真は実際の資料(B4版)の上半分のみを写している。

図3. スケッチ画の裏にあった事務書類の一例

図4. スケッチ画の裏にあった答案用紙の一例(回答者の名前はプライバシー保護のため隠した)

スケールバーは5cm。図2・3・4は同じ縮尺である。

る．ところが注*の用紙では最後尾がアルファベットで記されており，この表記方法は新制名古屋大学の初期に教養課程（理系）で用いられたものと考えられる．

旧制八高41回生は，39回生の卒業と時を同じくして，昭和24年3月に第1学年を終了した（表1）．そのうち比較的多数が新制名古屋大学に入学している．制度の移行期にあたり，入学試験は24年6月8・9日，入学式は7月22日，開講は8月22日であった〔前出通史二 p287・291，同部局史二 p211〕．この新制名大第1回1年次生の一半は，旧制八高最後の3年次生（40回生）と並行して名大瑞穂分校（旧八高校舎）で授業を受けた《他の半分は25年3月まで豊川分校（旧岡崎高師校舎）で受講》〔部局史二 p211〕．クラスの呼称を数字ではなく新制はアルファベットとしたとすると，並行して存在する旧制・新制の両者を一目瞭然に区別する上で有用であったと思われる．この昭和24年度に熊沢先生は新旧両学制の教授として生物学を担当されたわけである．

注*にある両名は資料 にはその名がないが，「八高名簿」にみるように旧制八高1年を修了しており，新制名大1年に入学して熊沢先生の生物学を受講したものとみられる．

新制名大第1回生は，2年次前半で教養課程を終えて，昭和25年11月に進学している〔名古屋大学理学部二十五年小史 p45〕．このことから，もしも熊沢先生の講義が25年4月から2年次生に対しても開かれていたとするならば，注*の一方または両方が25年度前半の試験答案である可能性も今のところ排除することはできない．

以上見てきたように，熊沢先生の研究資料用紙はその大部分が，昭和23・24両年度（あるいは少数ながら25年度）の生物学試験用紙であった．少数の事務書類は24年度末期に使用されたものである．

資料 ・ が作られた時期

「スケッチ画」「文献メモ」のいずれの資料にも作業日時の記入がないので，成立時期を厳密に定めることはできない．しかし資料 については，研究の性質上ある程度まとまった時間の取れる，春休みか夏休みを利用して描かれたものであろう．スケッチの始まりの頃，つまりスケッチに書かれた番号の若い何枚かには，昭和24年度後半に使用された（と考えられる）用紙が並んでいることから，同年度末つまり昭和25年の春休みが最初の可能性として考えられる．資料 の文献メモも，1）対象となった定期刊行物の発行年が1948～49（昭和23～24）年であること，2）使われた用紙のほとんどが昭和23年度の試験答案であることから，昭和24～25年頃に書かれたものと推察される．

資料 に関する追記

熊沢正夫著「植物器官学」裳華房（1979）には，シュロチクの維管束についての記述は見当たらない．また，著者らの知る限り，熊沢先生の主な論文にもシュロチクを取り上げたものは見当たらない．しかし，熊沢先生にとって単子葉植物の維管束はライフワークとも言うべき研究対象であり，シュロチクのスケッチも先生の知見に重要な役割を果たしたであろうと推察される．今回の資料が先生の業績の中で具体的にどのような位置を占めているのかは，この方面の専門家の検討が待たれるところである．スケッチ画には脇に書き込みがされたものもあり，そうした書き込みは，その際参考になると思われる．

謝 辞

資料がこのようなかたちで博物館に納まり大方の利用に供せられるようになった過程で，種々お力ぞえをいただいた高木典雄教授・安富眞澄教授に感謝いたします．

付属参考資料

この資料寄贈にあたっては、原より以下の参考資料が付されている。

- 1) 「第八高等学校同窓会名簿平成15年版八高会(2003)」から抜粋したコピー計20枚(39～41回生関連、および扉と奥付)
- 2) 葉書コピー1枚: 「進学式挙行の件通知」(昭和25年11月15日付け名古屋大学理学部長名発信、原幸喜宛)

引用文献

- 熊沢正夫(1979)植物器官学. 裳華房
名古屋大学(1995)名古屋大学五十年史通史二
(1989)同 部局史二
名古屋大学理学部(1967)名古屋大学理学部二十五年小史

(2004年9月30日受付)